

2022年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2022年度の学会賞が決定し、学術賞(単著部門)として岩田正美名誉会員ならびに永田祐会員が、奨励賞(単著部門)として史邁会員ならびに阿久津美紀会員が選ばれました。

授賞式は、第70回秋季大会一日目の2022年10月15日(土)に関西福祉科学大学において、開会式に引き続いて行われました。この模様はライブ配信され、後日、11月17日(木)までオンデマンド配信もされました(大会校企画シンポジウム動画の開始約1時間)。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



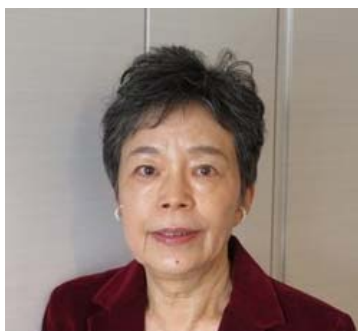
金子副会長 笹岡委員 黒木委員長 永田会員 阿久津会員 空閑会長 山縣副委員長 保正副会長

※岩田名誉会員、史会員はオンラインで授賞式に登壇されました。

◆ 学術賞(単著部門) 岩田 正美(日本女子大学名誉教授)

受賞作:『生活保護解体論 ——セーフティネットを編みなおす』

(岩波書店、2021年11月5日刊)



8月のはじめに、2022年度の学会学術賞を受けますか?というメールを事務局からいただいたときは、大変驚き、間違いではないかと返信をしてしまいました。なぜなら、私は春の大会で名誉会員への推挙をいただいたような後期高齢者で、なおかつ2017年度に学術賞をすでに頂いていたからです。要するに、もう「上がり」の研究者ですし、若い研究者の邪魔をしてはいけない、2度目では申し訳ない、という気持ちでした。ところが規定上、年齢制限や回数制限はないようなので、審査委員会が推挙してくださったと伺い、ありがたくお受けすることにしました。今回は他にも3人の受

賞者があり、いやーさすがに日本社会福祉学会は「全世代型」なのかな、とやや気持ちが楽になりました。

受賞作品は、かねてより疑問に思っていた生活保護制度の、社会保障・社会福祉制度全体の中での「孤立した位置」を本格的に解き明かしたいと考えたものです。生活保護については、いわゆる水際作戦などの手続問題や、自立支援がクローズアップされるわりに、制度それ自体を吟味する研究が少ないこと、また日本福祉国家の中核にある「国民皆保険・皆年金」制度との関係がほとんど議論されていないことが気になっていました。また生活保護基準と低所得基準との関係も整理されていません。それらの問題を並べた上で、複数の社会扶助へ解体する道を提案したものです。

当初は、特に貧困支援などを行っている若い方達を読めるようにと、一般書の体裁で、優しい表現を心がけたのですが、かなり複雑な制度論なので、私自身が勉強し直す部分が多く、その分難しいものになってしまったかもしれません。ここでの提案は、後に続く方達に補正していただきたいと思っておりますが、どうしても研究は「蛸壺」的になりやすいので、このようないくつかの制度にまたがる議論が浸透しにくいようには感じています。

◆ 学術賞(単著部門) 永田 祐(同志社大学)

受賞作:『包括的な支援体制のガバナンス

——実践と政策をつなぐ市町村福祉行政の展開』

(有斐閣、2021年10月15日刊)



この度は、拙書『包括的な支援体制のガバナンス 実践と政策をつなぐ市町村福祉行政の展開』に対して学会賞(学術賞)の栄誉を賜り、誠にありがとうございました。

本書は、社会の個人化に伴って顕在化した新たな生活困難への対応という課題に対して、「制度福祉間」そして「制度福祉と地域福祉の協働」という二つの協働によって対応していく包括的な支援体制をどのように構築していけばよいか、ガバナンスという視点から検討したものです。包括的な支援体制のガバナンスとは、実践を担う多様な主体との協働を通じて、国の施策を加工し、カスタマイズしていく領域であり、その多様な協働のプロセスのかじ取りを担う市町村福祉行政に求められる役割を明らかにしてきました。すなわち、マクロの政策とミクロの実践をつなぐメゾ領域を、法律による社会福祉の「運営」としてではなく、多様な主体のダイナミックな協働の舞台として捉え、それを推進していくプロセスを「ガバナンス」という視点から分析していくことを提起したものです。

このようなプロセスを明らかにしていくために、本書では包括的な支援体制の構築を担う担当課とその職員に対するインタビュー及び参与観察によって事例研究を行いました。調査対象は、筆者が一

定期間関与してきた自治体を選択しましたが、このことは、様々な形で自分自身が「実践」のアクターとなりながら、同時に研究者としての視点で現場に関与していくという、地域福祉研究の難しさを考えることにもなりました。地域福祉研究の方法については、今後も模索していきたいと考えています。

社会福祉は実践の学ですから、これからも現場で地道に努力している皆さんの実践に謙虚に学びながら、「講評」でご指摘いただいた課題を受けとめ、本書で述べた「未完のプロジェクト」を前に進めていく研究と実践に取り組んでいきたいと考えています。最後になりましたが、本書を精読くださった審査委員の先生方、本研究をとともに作ってくださった5つの自治体の関係者の皆様、そして、これまで私の研究を導いてくださった多くの先生方にこの場を借りて感謝を申し上げます。

◆ 奨励賞(単著部門) 史 邁(清華大学)

受賞作:『協働モデル

——制度的支援の「狭間」を埋める新たな支援戦略』
(晃洋書房、2021年3月20日刊)



大学院の時、指導教官であった埋橋孝文先生から、「良い研究」よりも「面白い研究」だと評価される方が嬉しく思いました。最初は「面白い」の意味が分からなかったのですが、同志社での七年間の留学生活の中で、だんだん分かるようになった気がします。「面白い研究」を目指した拙著は、この度、日本社会福祉学会の奨励賞をいただけて、光栄である一方、自分が思う「面白さ」が読者たち(とりわけベテランの先生たち)からの共感を得、認められて本当によかったと思います。ここで、自分が思う研究の「面白さ」を2点だけ自慢したいです。

一つは、多様な知との出会いです。拙著は、同志社大学社会福祉学科の博士学位請求論文として執筆したのですが、その内容は社会福祉学の話のみに限りません。研究目的を達成するために、多様な学問分野の知見・方法に幅広く、積極的に触れました。例えば、前半の理論部分では、伝統的な福祉多元主義理論(社会福祉学)以外に、新制度派組織論(組織社会学)、官民協働論(行政学)などの分野の論点も批判的に考察しています。後半の事例検討の部分では、若者支援の福祉支援事例に焦点化したものの、サービス・マネジメント論(経営学)で慣用された分析手法を大胆に応用しています。

もう一つは、新たな知の作り出しです。「協働」という言葉がこれまでの研究書や公文書において、当たり前のように曖昧に濫用されている現在、拙著では随波逐流せず、その根本を問い直しました。特に、世界的に注目されている「コ・プロダクション」(co-production)という概念視座を福祉領域の「狭間」問題に応用するのは、拙著の「売り」だといえます。この中で最も美妙的なのは、やはり詳細な検討を踏まえて実際の社会サービス生産活動の実践場面から、新たな理論を自ら体系化していく過

程でした。行き詰まった時もありましたが、この体験こそが、本研究が従来のどの研究とも異なる、学問的なオリジナリティだと言えましょう。

おそらく、面白い知を色々吸収することが、自身の研究の面白さにもつながったのでしょう。これからも「面白い」研究を目指し、引き続き頑張りたいと思います。

◆ 奨励賞(単著部門) 阿久津 美紀(目白大学)

受賞作:『私の記録、家族の記憶

——ケアリーヴァーと社会的養護のこれから』

(大空社出版、2021年8月13日刊)



この度は奨励賞に選んでいただき、身に余る光栄で、身の引き締まる思いです。これまで研究でお世話になった方、また沢山の著作物の中から拙著を選んでいただきまして、審査委員会の先生方には感謝と御礼を申し上げます。この本は、大変拙い文章で恐縮ですが、児童福祉に関する記録の問題について焦点を当て、この課題に多くの方が関心を寄せてほしいと思い、刊行に至りました。

私はアーカイブズ学という記録管理や情報管理を研究する学問分野に軸をおき、アーカイブズ学の研究を開始した当初から社会的養護を研究フィールドとして設定してきました。この本は大学院の博士課程から現在に至るまでの研究成果となります。研究の過程で多くの児童福祉施設に訪問させていただき、調査をさせていただきました。一番長期にわたって調査で訪問させていただいている施設は、大学院の修士課程の時からお世話になっています。当時、調査のために施設に訪問し、お会いした職員の方から「研究者は一回来て、その時見たことだけで決めつけて、成果にするから嫌いだ」と言われ、長期的に足繫く通い、関係を築いていかなければいけないと腹を括った帰り道のことを十数年経った今でも思い出します。職員の方の仰るように、長期に関わってきたことで、見えてきたことも多くあり、あの時に率直な言葉をいただいて良かったと心から感謝したいです。

2016年から2018年にかけて、児童自立支援施設北海道家庭学校の中に住み、職員や入所児童の話や様子から学ぶ機会に恵まれました。その成果は、今回受賞させていただいた拙著には含まれていませんが、長い歴史をもち、民間の児童自立支援施設として運営されてきた貴施設の中で過ごし、学んだことは、拙著の構成を考える上で基礎となる部分を構築しています。

今後も今回の審査を通していただきましたご指摘を真摯に受け止め、一つ一つ積み重ねを大切に、研究に邁進していきたいと考えております。